二〇二二年一〇月二一日

神にます大磐巡り秋惜しむ　こすもす
墨痕にこもる気魄や秋灯下　千鶴
行列の先に湯気立つ豚饅屋　みきえ
あるなしの風に大仰秋桜　明日香
萩散るや墓誌に童の名がひとつ　ひのと
星流る子午線にたつ時計台　千鶴
目を少し病みて勇気のサングラス　あひる
米処止まり木に飲む新走り　智恵子
木の実落つ音聞き分ける深夜かな　かえる

二〇二二年一〇月二〇日

どんぐりでお店ごつこのお支払い　かえる
菊晴れやガラシャ像たつ大聖堂　たか子
霧ぶすま走れば動く杉木立　素秀
夕花野癇癪の子を置いてゆく　ひのと
小糠雨とどめて光る芒の穂　素秀
朝寒の腕大振りにウオーキング　満天

二〇二二年一〇月一九日

地球釣りあげるばかりの根釣かな　なつき
秋蝶の紛る野の花草の径　千鶴
牧の朝嘶く馬の息白し　智恵子
痩せ犬の吠えて身震ひする夜寒　素秀
風倒樹手つかずのまま冬隣り　たか子
老い母の窓辺にかほる金木犀　あひる

二〇二二年一〇月一八日

喪の家に手合はせてゆく月夜かな　ひのと
手に触れて日の温みある力石　ぽんこ
玉砂利に裾を引きずる七五三　なつき
濡れ髪に櫛目の残る夜寒かな　ひのと
稲藁のロール転がる大刈田　千鶴
トタン屋根撥ねる木の実の音楽し　こすもす
鳥渡る幼稚園児の指呼の空　宏虎

二〇二二年一〇月一七日

あくびする河馬の大口秋日和　みきお
人知れぬ古道をふさぎ花芒　素秀
山道の採るに採られぬ柿たわわ　ふさこ
手捻りの形見の壺に草の花　あひる

二〇二二年一〇月一六日

秋晴や両手を挙げて一輪車　満天
旅心ふつふつ湧くや鰯雲　千鶴
立てかけし杖に影あり真夜の月　せいじ
名人の落語に笑ふ夜長かな　澄子

二〇二二年一〇月一五日

金風裡花嫁行列山路越え　うつぎ
ランドセルからぺしやんこの赤い羽根　ひのと
観音の御手に置かるゝ露の玉　ひのと

毎日句会みのる選・二〇二二年一〇月二三日